

普段の僕なら、まず足を踏み入れることのない、街の隅にある古びたレンタルビデオ店。

大学の講義が終わった後、誰かに見られていないか何度も背後を振り返りながら、僕は逃げ込むようにその「場所」へ入った。

（よ、よし、お店には他に誰もいなかった……！）

重い遮光カーテンの先。埃っぽさと独特の熱気がこもる、薄暗いアダルトコーナーだ。

派手なパッケージが所狭しと並ぶ棚の前で、僕の心臓は服の上からでもわかるほど、うるさく脈打っている。

僕は、男だけど、全人口の約5～7%にあたる、カントボーイだ。男性性を持つが、男性器はなく、女性器を持っている。カントボーイは役所への申告義務は必要だけれど、学校・職場への申告義務はない。だから言わなければバレない。もちろん僕も家族以外には言っていない。

だけど一度くらい、ちゃんとした映像で「勉強」してみたいと思ったけれど、ネットで買うと履歴が残ってしまう。だからこそ、あえてアナログな実店舗を選んだのだけれど。

(……早く、選んで出なきゃ。もし、大学の知り合いにでも見られたら、大変だし……)

震える指先が、棚の隅にあるひとつのタイトルに触れた。その、瞬間だった。

「——珍しいもの選ぶんですね」

背後から耳に届いた、低くて落ち着き払った声。全身に冷たい電流が走ったような衝撃を感じて、僕は弾かれたように振り返った。

そこに立っていたのは、紺色のエプロンを無造作に身に着けた、一人の青年だった。

理知的な光を宿した瞳に、整いすぎた顔立ち。胸元の名札には『早川』と記されている。僕より二つ

三つ年上だろうか。その静かな佇まいは、この卑俗な空間にはおよそ不釣り合いなほど端正だった。

「あ、えっと、これは……その、たまたま手が当たっただけで……」

「たまたま、ね……」

早川さんという店員は、僕の拙い言い訳を切り捨てるように一步踏み込んでくる。

逃げようと視線を彷徨わせる僕を、彼は逃がさなかった。その視線は、僕のすべてを見透かしているかのように一点に定められていた。

「君は五分钟前も、店の前を二往復してたよね。それからお店に入ってもあっちの棚で三分、こっちの棚で二分。……最後にその、一番過激な内容のものを選んだ」

「……っ！」

羞恥で頭の中が真っ白になった。

知らない間に、僕の挙動を、無意識の癖まで、この人はすべて見ていたんだ。

「ごめんね、他にお客さんがいなくて暇だったんだ。これでいいんだよね？」

彼は僕の手から、握りしめていたパッケージを静かに取り上げた。

長い指先が、そこに踊る扇情的な文言をなぞる。その動作があまりに淡々としていて、かえって僕の隠したい部分を抉り出されているような気分になる。

「あ、あの、それは……大学の、その、ゼミの資料として、どうしても必要で……」

反射的に出た嘘を、早川さんは面白そうに、それでいて確信に満ちた目で見つめた。

「そうなんだ。君の大学では、こんな過激な映像を『資料』にするんだね」

「えっと、はい……現代社会の、フィールドワーク
というか……」

「なら、中身を確認せずに提出するのは、学生として不誠実じゃないかな。……ちょうどいいや。奥のモニターを使っていいよ。今は僕しかいないから」

「え、あ、あのっ、そんなの申し訳ないです！」

「いいから。こっちだよ」

彼は僕の腕を掴んだ。細身に見える指先には、僕のような凡人が抗うことのできない、圧倒的な支配力がこもっている。僕ははっきりと拒絶することができず、そのままスタッフ専用の重い扉の向こう——バックヤードへと連れ込まれてしまった。

バックヤードは外よりもさらに狭く、壁側にはロッカーと小さなソファ。そして古いモニターが置かれていた。

「そこに座って。君の『勉強』を手伝ってあげる」

早川さんは事務的な手つきでモニターの電源を入

れた。

「あ、あの、早川さん……」

「何かな、川村くん」

「……え？ な、名前……」

（名乗ってもいないのに……）

「あ、あの……やっぱり、急な用事を思い出しました。今日は、これで失礼します……っ！」

「用事？ でも、資料が大事なんだろう？ 大学で使うならちゃんと調べるべきじゃない？」

「そ、それは、……」

「ほら、もう始まるよ」

有無を言わせぬ口調に気圧され、僕はソファに深く沈み込むしかなかった。

カチリ、と彼がリモコンを操作すると、モニターに鮮明な映像が映し出される。静まり返った室内。響き渡ったのは、背徳感に満ちた「大学の部室」を舞台にしたビデオの音声だった。

画面の中では、放課後の蒸し暑そうな部屋で、数

人の男たちに囲まれた一人の「特別な体」を持つ少年が、なす術もなく震えていた。

『ほら、これ……合宿の特別手当、だよな？』

『あッ♡ や、やめて……っ！ 誰か、誰か来ちゃう……っ♡♡』

（うわ、どうしよう……なんで、こんな……）

冷たい汗が背中を伝う。バックヤードの冷房は効いているはずなのに、早川さんの視線を感じるだけで、僕の体温は異常なほどに跳ね上がっていた。

僕の焦燥を置き去りにして、画面の中の出来事は残酷なほどスムーズに進んでいく。

『そんなに震えるなよ？』

『あッ♡ ひ、ひいっ……っ！ や、やだ……っ！！♡♡』

画面の中では、男たちが少年の衣服を強引に捲り上げ、露わになった胸元に無遠慮な指を這わせてい

る。さらに別の男が、少年の胸へと手を滑り込ませた。

『ひっ……あッ♡ やだ、そこ……そんなに、強くしないでえ……っ！♡♡』

少年の尖った突起が、指先で執拗に弾かれる。そのたびに画面の中の彼は腰をビクビクと跳ねさせ、快楽と恐怖の混ざった声を漏らしていた。

「……あれ？ 川村くん。顔が、すごく赤いよ」

「あ、い、いえ……別に、なんでも……」

「しっかり見ないと。『資料』なんだから。それとも、別のところに集中してるのかな？」

「……は、い……。見て、ます……ちゃんと……」

早川さんの視線が、モニターではなく、僕の顔にずっと固定されていることに気づいて、僕は逃げ場を失ったまま、ただ熱くなる体を震わせることしかできなかった。

一方、モニターの画面では、僕と同じ「特別な身体」を持つ少年の下半身が、逃げ場のない角度でアップになって映し出されていた。

『あッ♡ ああんっ！♡♡ そこ、布の上から……擦られるの、変な感じい……っ！♡♡ ぐちゅ、ぐちゅって……変な音があ……っ！♡♡』

映像の中の男が、少年の下着を手のひらで乱暴に押し潰し、円を描くように執拗に愛撫する。そのたびに、清潔そうな綿の布地がじわじわと、透明な蜜で色を変えて重くなっていくのが分かった。

（う、うわあっ。あんなに、ぐっしより濡れて……っ。音が、ぐちゅぐちゅ、じゅるじゅるって……僕の耳元まで聞こえてくるみたいだ……っ♡）

『あッ♡ あ、あぁっ！♡♡ すごい……っ！指が、ナカに入ってきて……っ！あひいっ！♡♡ ぐちゅぐちゅ、掻き回されてるぅ……っ！♡♡』

（うそ……、あんなに乱暴に。でも、彼の顔……す

ごく、気持ちよさそうに蕩けてる……っ♡)

『あッ♡ あ、あぁっ！♡♡ すごい……っ！ おまんこのナカ、三本も指が入ってきてえ……ぐちゃぐちゃに掻き回されてるう……っ！♡♡』

画面の中の少年は、もはや自分が男であるプライドも羞恥心もかなぐり捨てたように、淫らな喘ぎ声をバックヤードの冷たい空気の中に撒き散らしていた。

『ひいっ♡ 指の関節が、ナカをゴリゴリ擦ってるう……っ！♡ 熱い、熱いのおっ！♡♡ ぐちゅぐちゅ、音がしてる……壊れちゃうくらい……あひいっ！♡♡』

モニターからは、少年の言葉を裏付けるような、激しく湿った『ぐちゅ♡ じゅるり♡』という粘膜が擦れ合う音が絶え間なく響いている。男たちの指がナカを激しくかき混ぜるたびに、少年の腰が大きく跳ね、震えているのが見て取れた。